

水辺のレジャーにおけるライフジャケットの着用と安全な使用に係る現状と課題

第1 水難者数とライフジャケットの着用効果

1 水難者数

・警察庁の統計

過去5年間（2019~2023年）の水難者数は、全国8,017人、東京都407人であった。傾向として、水難者数はおおむね横ばいで推移しており、子供（中学生以下）と比べると、大人（高校生以上）の水難者が多い。また、過去5年間の水難者の死者・行方不明者の割合は、全国で45%、東京都で59%と高い傾向を示している。

・東京消防庁の救急搬送事例

東京消防庁管内における過去5年間（2019~2023年）の水難に伴う救急搬送者数は、281人であった。傾向として、死亡が34%、重篤が27%と、重症度が高い人の割合が全体の6割を占めている。また、年齢別に見ると、65歳以上が全体の4割と高齢者が多い傾向がある。

2 危険経験、ライフジャケット着用で助かった経験

・アンケート調査

過去5年間に水辺のレジャー経験がある都内在住の2,000人を対象にアンケートを行った。

ライフジャケット非着用者に「水辺で溺れた・溺れそうになった経験などはあったか」を尋ねた。その結果、2.2%が危険な経験があったと答え、その中には、「子供を助けに行った時に溺れかけた」、「離岸流に流された」、「浅いのに波に巻かれ上下がわからなくなった」等の事例があった。

また、ライフジャケット着用者に「着用の効果がある／着用していたことで助かったと感じた経験はあったか」を尋ねた。その結果、18.1%が助かった等の経験があったと答え、その中には、「河に流されたがライフジャケットが浮き輪になった」、「ライフジャケットを着用していたので安心感があり冷静さを保てた」、「親が目を離れた子供が1人で浮いていた」といった事例があった。

3 ライフジャケットの着用効果

・海上保安庁の統計

過去10年間（2014~2023年）のマリンレジャーに伴う水難者の死者・行方不明者の割合は、ライフジャケット着用者は、非着用者に比べて低くなっている（釣り中で12%、遊泳中で21%、磯遊び中で32%低減している）。

・検証実験（ライフジャケットの着用効果検証）

淡水の水槽内で、被験者が立位に近い姿勢で浮遊する試験を行った。ライフジャケット非着用時は被験者の口位置が水面下になり呼吸が困難な状態であった一方、着用時は口位置が水面上になった。ライフジャケットは、その浮力により着用者の顔面を水面上に支持できるため、落水時等の呼吸可能な浮遊姿勢の確保に有効であることが確認できた。

4 ライフジャケット着用の必要性

水辺のレジャーにおいてライフジャケットを着用することは、水上での呼吸可能な姿勢確保に有効で、水難時の生存率を上げるため、水難者の死者等を低減するのに有効であると考えられる。

第2 水辺のレジャーにおけるライフジャケットの着用実態

1 ライフジャケットの着用状況

・実地調査

都内計10か所の水辺（海、川、湖）で、ライフジャケットの着用状況の実地調査を行った。

レジャー別では、「ボート（90.9%）」で着用率が高かった一方、「水遊び・遊泳（13.0%）」、「釣り（7.9%）」が低かった。

年齢層別では、「大人（概ね中学生以上）」の着用率が「子供（概ね小学生以下）」と比較して低い傾向があった。特に着用率の差が大きかった「水遊び・遊泳」では、子供の着用率が21.3%に対して、大人の着用率は2.5%であった。

場所別では、「水遊び・遊泳」、「釣り」では、「川・湖」と比べて「海」での着用率が低かった。特に「水遊び・遊泳」における子供の着用率は、「川・湖」が25.1%に対して「海」が10.8%と低い傾向があった。

・海上保安庁の統計

過去10年間（2014~2023年）のマリンレジャーに伴う水難者のライフジャケット着用率は、釣り中（25.7%）が比較的高い一方、遊泳中（4.2%）、磯遊び中（1.8%）は低い傾向を示している。

・アンケート調査

水辺のレジャー活動時にライフジャケットを着用していたと回答した人（「持参」、「有償レンタル」、「無償レンタル」を含む）は、約5割であった。なお、「水遊び・遊泳」、「魚とり」、「釣り（陸上から）」は、他のレジャーと比較して着用者が少ない傾向があった。

ライフジャケットを着用していなかった人に対し、「ライフジャケットを着用しなかった理由」を尋ねたところ、「水深が浅く溺れる危険性がないから」が34.6%と最も多く、次いで「水中に転落したり、水に流されたりする危険性が少ないから」が21.8%、「ライフジャケットをもっていないから、その場になかったから」が20.1%と続いた。

2 ライフジャケットの保有状況

・アンケート調査

「現在ライフジャケットを持っているか」を尋ねたところ、大人用の所持している人は19.6%、子供用を所持している人は37.8%であった。

ライフジャケットの所持者に対して、「ライフジャケットを購入・入手した動機」を尋ねたところ、「水に落ちる、流された際などに溺れないため」が大人用33.0%、子供用31.3%、「水難事故に関するニュースを見聞きしたから」が大人用28.9%、子供用36.2%と、回答した割合が

大人用・子供用ともに高かった。

ライフジャケットを所持していない人に対して、「持たない理由」について尋ねたところ、「使用頻度が少ないから」が大人用34.1%、子供30.0%、「レンタルすればよいと考えるから」が大人用31.7%、子供34.4%と、回答した割合が大人用・子供用ともに高かった。その他、大人用では、「海や川に入らないから」が16.2%であり、子供用より約10%高く、他の理由と比較して大人用と子供用の差が目立った。

3 ライフジャケットの改善や着用浸透への取組の要望

・アンケート調査

「ライフジャケットについて改善してほしいと感じる点、こうであれば使いたいと思う点」を尋ねたところ、最も回答が多かったのは「持ち運びのしやすさ、保管のしやすさ」で28.6%、次いで「動きやすさ」が25.2%、「メンテナンス（部品交換、使用前点検など）の容易さ」が22.5%であった。

また、「水辺のレジャー時のライフジャケット着用が社会により浸透するには、どのような取組や環境が必要か」を尋ねたところ、最も回答が多かったのは「購入しやすい価格のライフジャケットの普及」で31.2%、次いで「折り畳めたり、コンパクトに収容できるなど、持ち運びしやすいライフジャケットの普及」が27.6%、「レジャーを行う場所や近隣店舗でのライフジャケットの貸出の推進」が23.7%であった。

4 課題

統計及び実地調査等から、「水遊び」、「遊泳」、「釣り（陸上から）」などの水辺のレジャー活動でライフジャケット着用率が低い傾向があった。水難による重症化を防ぐためには、ライフジャケットの購入、着用の検討を促す必要がある。また、大人の着用率の低さが目立つことから、子供だけでなく、大人も着用の検討が必要なことも訴求する必要がある。なお、着用促進のためには、事故が多いというネガティブな情報だけでなく、ライフジャケットの着用効果や使うことで助かったといったポジティブな情報を示すことも有益であると考えられる。

アンケート調査から、こうであれば使いたいと思う点（改善点）は、「持ち運びやすさ・保管しやすさ」、「動きやすさ」、「メンテナンスの容易さ」という内容が上位であった。また、ライフジャケットを持たない理由としては、「使用頻度が少ない」、「レンタルすればよい」という回答が多かった。これらのライフジャケットへの要望を反映させ、消費者が「購入したい、着用したい」と感じるようなライフジャケットの実現を図る必要がある。

第3 商品の安全性

1 法令・規格・基準

(1) 国内におけるライフジャケットの着用義務

小型船舶では「船舶職員及び小型船舶操縦者法」にて、原則着用が義務づけられているが、小型船舶に該当しない船舶やその他のレジャー時には、ライフジャケットの着用義務はない。

(2) 国内におけるライフジャケットの安全基準

小型船舶用に着用が必要となるライフジャケットは関係法令において性能基準が定められている一方、水遊びなどで着用するライフジャケットに強制規格はない。このため、水辺のレジャーで用いられるライフジャケットは、性能基準が有るものと無いものが混在している状況である。

小型船舶用に着用が必要となるライフジャケットは、船舶安全法に基づく小型船舶安全規則等で性能要件が規定されている。その多くは、型式承認により基準適合が確認されている。

小型船舶乗船時以外の水遊びなどの水辺のレジャーで着用するライフジャケットでは、日本小型船舶検査機構の「レジャー用ライフジャケットの性能確認試験基準」の鑑定品や、川に学ぶ体験活動協議会の「RAC川育ライフジャケット認定規則」の認定品がある。

(3) 海外におけるライフジャケットの着用義務

アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリアの4か国において、水辺のレジャー時に使用するライフジャケット等の着用は、主にカヌーやカヤックを含む船舶乗船時に義務付けられており、船舶の種類又はレジャーの内容等によって対象年齢や浮力基準が異なっている。他方、各国とも、海岸・湖・川での水遊び等の乗船を伴わない水辺のレジャー（一部除く）については、ライフジャケットの着用義務は確認されなかった。

(4) 海外におけるライフジャケットの安全基準

水辺のレジャー時に使用するライフジャケット等の主要規格として、アメリカでは「UL 12402」、欧州では「EN ISO 12402」、オーストラリアでは「AS 4758」が該当する。各規格における「浮力試験」、「浮遊試験」、「強度試験」等の試験方法や要件について比較した結果、いずれもISO12402をベースとした規格であることから、細かい諸条件に違いはあるものの、試験方法や要件に大きな差は見られなかった。

2 ライフジャケットの安全性に関する消費者の意識

・アンケート調査

「購入する際に重視する点」について尋ねたところ、大人用は「価格」の次に「安全性の担保」という回答が多かった。子供用については「安全性の担保」に関する回答が最も多かった。また、「ライフジャケットについて改善してほしいと感じる点、こうであれば使いたいと思う点」という設問でも、「安全性の担保」という回答は18.3%で上位であった。

一方、「ライフジャケットに関する内容について、知っているものはあるか」を尋ねたところ

ろ、「ライフジャケットには、性能基準を満たしていることを示すマーク（桜マークなど）がついているものがあること」については、全体の15.2%しか把握しておらず、ライフジャケット所有者は29.0%、非所有者では11.4%という認知度であった。

なお、ライフジャケットを保有している人に対して「認証等のマークがついているか」を尋ねたところ、約7割の人が認証等のマークが付いた製品を購入していた。大人用のライフジャケットでは、「桜マーク」が23.5%、「CSマーク」が16.9%、「CEマーク」が13.0%、「RAC認証マーク」が10.0%であった。子供用のライフジャケットにおいては、桜マークよりCSマークが多い傾向はあるが、全体の傾向としては大人用と同じ傾向を示していた。

3 第1回協議会委員意見

- ・活動環境やレジャー内容に応じた選択の必要性

性能基準に適合した製品であっても、活動環境（流水等）やレジャー内容によっては、密着性が足りず脱げてしまうことなどもある。

4 課題

消費者はライフジャケットに対して安全性を求めている一方、認証等のマークがついた製品があることを認知している人は少ない。このため、性能基準への適合を示すマーク等の認知度の向上を図る必要がある。

また、性能基準に適合した製品であっても、活動環境やレジャー内容によっては適さない場合もあることから、ライフジャケットの選択時に注意が必要な活動環境やレジャー内容、ライフジャケットの特性を踏まえた着用時の注意点などについて周知する必要がある。

第4 ライフジャケットの使用実態

1 不適切な使用事例

- ・アンケート調査

「レジャー活動中、ライフジャケットを着用した際に、不具合が生じた経験はあったか」を尋ねたところ、不具合を経験した人は11.4%であった。その中には、「締め忘れて脱げてしまった」や「紐の締め付けが甘く脱げそうになった」、「ゆるく絞めていたので、隙間ができて身体が半分沈んでしまった」など、緩く着用したことで脱げた、脱げそうになった、体が十分に浮かばなかったとの経験が複数確認された。また、「サイズが大きいため脱げそうになった」など、サイズが大きくなり脱げそうになった経験も確認された。

2 不適切な使用の検証

- ・検証実験（不適切な使用を想定した浮遊試験）

＜調節ベルト、股ベルトを緩めたもの＞

調節ベルト、股ベルトを緩めると、適切な着用時と比較して浮遊時の口元高さ（水面から口元までの垂直距離）が低くなった。また、ベルトを緩める幅が大きいほど、口元高さは低くなる傾向があり、調節ベルトを大きく緩めたり、股ベルトを外したりすると、口位置が水面下になる場面もあった。

＜体格に対して過大なサイズのもの＞

調節ベルト等を緩めた状態で過大なサイズを着用すると、適切なサイズ着用時と比較して口元高さが低くなる傾向があった。また、ライフジャケットが浮き上がりやすく、着用時の視界や動きを妨げる傾向もあった。

＜浮力体が潰れたもの（重量物を載せたもの）＞

浮力体が潰れたものを着用すると、正常なものの着用時と比較して口元高さが低くなった。これは、重量物で浮力体が潰れライフジャケットの浮力が減少したためであった。

3 使用方法等の認知状況

- ・アンケート調査

「本体に記載されている注意事項や取扱説明書を使用前に読んだか」を尋ねたところ、「全部読んだ」と回答した人が約4割、「一部読んだ」が約3割を占めた。

「ライフジャケットに関する内容について、知っているものはあるか」を尋ねたところ、ライフジャケット所有者の認知度は、「サイズが大きかったりベルトの締め付けが緩いと、水中で脱げてしまう場合があること」は36.4%、「股ベルトがあるもので股ベルトを使用しないと、水中で脱げてしまう場合がある」は29.9%、「固型式ライフジャケットの上に重いものを載せると、潰れて浮力が低下する恐れがあること」は23.1%であった。

4 サイズ等の表示状況

- ・表示調査

ライフジャケット15種類について、本体及び添付書類の表示調査を行った。

目安となる「身長、体重、胸囲」の表示状況は、「3項目すべて表示」が2種類、「いずれか2項目表示」が3種類、「1項目表示」が3種類、「表示なし」が7種類と、商品によって表示されているサイズの項目が異なっていた。

使用等に関する表示状況は、「股ベルトやファスナーを適切に着用すること」は11種類、「着用前に破損や破れを含む不具合がないかを点検・確認すること」は10種類、「着用方法」は9種類、「着用方法のイラスト」は7種類、「自身のサイズにあった製品を着用すること」は7種類で表示があった。

5 表示に関する規定

国内基準と海外規格を比較すると、規定内容が異なっており、海外規格では国内基準よりも細かい表示要件が課されている。国内規格においては、名称、型式、ロット、製造者、体格範囲などの基本的な情報について主に規定されている。

一方で、例えば欧州の規格（EN ISO 12402-5）では、「製造業者の指示に従い、使用前に必ず確認すること」、「クッションとして使用しない」、「製品の使用についてトレーニングすること」など、製品を使用するうえでの具体的な注意事項が明記されている。また特に、UL規格では、「ISO規格及びAS規格」と比較しても、文字の書体やレイアウトを含め、より詳細な表示要件が規定されている。

6 課題

調節ベルト等の締め付け不足やサイズ不適合などの不適切な使用事例が複数確認できた。また、ベルトの締め付け不足で脱げる可能性や重量物で浮力体が潰れる恐れがあることなどの認知度は低く、正しい着用方法や保管方法を理解しているライフジャケット使用者は多くないと考えられる。

誤った着用方法や性能低下したものの継続使用を減らすため、ライフジャケットの使用者に対して、正しい使用方法等を理解してもらう取組が必要である。